文庫めぐり (4)

金沢大学医学図書館

金沢大学医学部の淵源は加賀藩藩校に遡る。従って古医書には壮猶館、卯辰山養生所、金沢藩などの蔵書印を多く見受ける。医書以外は前田育徳会の尊経閣文庫に収蔵されている。昭和五一年約三年間かけて和書一三六五冊、洋書二一一九冊（一九〇〇年以前）を整理して『古医書目録』が刊行された。和書では解体新書、医範提綱、内科撰要、和蘭字彙、和蘭語学原始など数多く収蔵しており、写本も少なくない。目録は作成されたが（全国医育機関図書館に配布）、広く活用されていない。最も問題となる点は、現代の図書館員はじめ大学人達には古医書の評価が全く出来ないことである。

明治期の医学史を研究していると、しばしば原著の洋書に接しなければならない。その際明治期教鞭を執った教授らの蔵書印をみるが、これらは全て教授ら（下平用彩、木村孝蔵など）の寄贈書である。明治末から大正期にかけて教員、学生を網羅し組織されている『十全会』が呼びかけて広く収集した寄贈書も極めて多い。しかし、これらの貴重書は日常の図書館書架から追放され日の目を見ない別庫住まいである。時流として片付けることなく、合理的管理保管を急ぐ必要がある。

大正十二年金沢医学専門学校は医科大学に昇格した。大学の基盤は研究教育のための専門書、雑誌の収集にあったので、当時就任を予定されドイツに留学中の古畑種基、山田詩郎らは（マルクの下落時代）積極的に主として学術雑誌を創刊号に遡って収集し大学へ送った。大正十二年～十四年までに凡そ十三万円相当の図書費が消費された。この結果、医史学的研究をする者にとっては、直接原著に接することとなり、その恩恵は甚大である。

平成期に入り、筆者は春、夏に余暇を設定し古医書目録を補完するため未整理の図書の選別作業を開始し、和書五〇〇余、洋書一三〇余を別庫に保管して『補遺版』三六頁を平成五年に刊行した。現在、最も気掛かりなことは、昭和十八年～二十五年に発刊された医書、医学雑誌は紙質、印刷ともに粗雑であり、この保管を如何にすべきかであり速やかな対応を目下考慮中である。このことは全国の図書館の共通課題であることを忘れてはならない。

収蔵図書、雑誌について、問い合わせを希望される方はつぎのＦＡＸ〇七六―二三四―四二一一、医学図書館（野村洋子係長宛）を利用されるとよい。場合によって筆者が仲介します。

（寺畑　喜朔）